



鳩山外務大臣と握手を交わすジェイムソン首相（一九七七年）。中央はランキン大使。

針決定をみるに至った背景には、(一)冷戦→緊張緩和、多極化時代の到来という国際環境の変化、(二)トルドー首相のフランス系カナダ人としての外交ビジョン、(三)「アメリカ化」を防止しようとするカナダ国民のナショナリズム、(四)そのナショナリズムに基づくカナディアン・アイデンティティの模索、(五)日本・中国を含む太平洋地域への関心度の増大、等の要因があった。

このうち日本にとってとくに重要なのは第五の要素である。カナダは自国を太平洋地域の国家として位置づけるようになっており、このことはすでに大阪万博のカナダ・デーでトルドー首相が、「カナダ国民は太平洋地域を『Far East』としてではなく、『Our New West』として再認識すべきである」と強調したことからも明らかであり、一九七〇年の外交白書でもその一篇を「太平洋」にあてている。この方針は中国承認交渉→両国間の国交樹立（七〇年秋）や太平洋地域にある低開発諸国の積極的な援助等にも表われているが、なんといってもその機軸は対日関係である。カナダの「第三の選択」と「環太平洋外交」は表裏の関係にあり、「第三の選択」を実現するために環太平洋諸国、とくに日本との関係を強化し、逆に、日加間の貿易および友好関係の飛躍的進展や中国承認が、多元的国际関係の台頭ともあいまって、「第三の選択」を生み出す一つの誘発剤ともなった。一九七四年九月に発表された「田中・トルドー共同声明」や、一九七六年十月の「日加経済協力大綱」「日加文化協定」「三木・トルドー共同声明」等の一連の動きは、

カナダ外交のこうした新しい枠組のなかで把握されなければならない。

ところが、最近になって、「第三の選択」は影をひそめた感がある。これは一つには、カナダの経済状態が悪化したことによる。一九七八年度の実質経済成長率は、当初、四・五パーセントと見込まれていたが、実際は三パーセント程度にとどまった。失業も三〇年代のそれに比類するほど最悪の事態となっている（七八年度平均八・五パーセント）。こうした状況は、カナダをしてアメリカと密接な経済提携を維持せざるを得ないことを再認識させることになった。第二に、ソ連の人工衛星がカナダ領土に墜落したことや、スパイ事件によるカナダ・ソ連関係の緊張が、一旦「アメリカ離れ」しかけたカナダを再び「アメリカ寄り」にした、ということもある。第三に、ケベック問題をはじめとする国内の分離・地域主義的傾向が、トルドー政権をして憲法改正等の国内問題の処理を優先させ、外交問題——とりわけ自主外交の理念など——は、目下、二の次になってしまったことも一因する。しかし、もう一つの要因は、いつまでたっても消極的で優柔不断な日本の対カナダ態度——カナダ側からすれば、一種の期待はずれ——にもあるのではなかろうか。

三、日加関係の展望

日加関係史を概観するとき、それは大きくは戦前と戦後に分けることができる。戦前の特徴は、両国関係が、日本にとってもカナダにとっても、一般に「辺境（フロンティア）問題」として考えられていたことである。

い目で迎えた。博士の心境に想いを馳せる時、深い感慨を覚える。

先日ビクトリアのジュビリー病院を訪ねた。すでに博士を休ませてくれた当時の面影はなく建替えたようであったが、病院では私の拙画の寄贈を快く受けて下さった。これから想を練って描くつもりだが、このささやかな行為が、博士の鎮魂に役立てば、私が当地に來た意義もあらうかと思う。

ながい間念願していた病院の玄関に立った時、はからずも博士の死生観の記述を想起した。それは博士がメーテルリンクの「青い鳥」の芝居で印象に残るといった科白。

『死んだ人も、世の中の人の忘れている間は死んだというので、祈念してくれる人があると、そのたびごとに生き返る』

したがってその関係は、おのずから「断片的」でしかありえなかった。これに比べて戦後の特質の一つは、少なくともカナダにとっては、当初からその包括的対外政策の一環として日本を位置づけてきたこと、第二には、日本の外務省も認めているように、「戦前に比較して（カナダの対日感情が）著しく友好的」になったことである。この二つの傾向は時を経るに従って、しだいに顕著な現象となり、その帰結として、一九七六年には「日加経済協力大綱」や「日加文化協定」も締結されることになった。

しかし、こうした動きの「仕掛人」は、いつもカナダであった。日本の側にあつては、その「大國中心外交」は戦前も戦後も大差なく、最近いわゆる「資源外交」

んだ」（中央公論、大正二年十月号）



博士は生きておられたのである。さればこそ博士没後、太平洋の橋は幻になったかも知れないが、かつて博士が予言したように、「我等の理想の誤らない事を示す」ように再び橋は姿を現わしたのである。

UBC新渡戸記念公園に隣接したアジア・センターも、工事が再開していた。これが完成すれば、太平洋のかけ橋はいよいよ強くなろう。

（右の絵は、筆者が描いた新渡戸記念公園）

が展開されるようになってはじめて、対カナダ関係は辺境問題から脱出しつつあるように見受けられる。したがって戦後の日加関係は、表面的には緊密化の一端をたどってきたように見えながら、その実、もっと深い所で、相互に歯車が噛み合わないまま進行してきたのではなかろうか。この齟齬が、皮肉にも「日加国交五十周年」を記念すべき年にあたって、顕在化してきたようである。その証拠に、日加両国政府は、この外交史上非常に有意義な出来事に対して、なんと冷淡な態度——少なくとも現時点までは——をよそおっているのか。

この「ずれ」の感を免れ得ないのは、根本的には、両国の外交理念の相違にある。戦後カナダは、いち早くデービッ